



「たんざく」に復興の夢

それぞれの願いをこめた 長田たなばたまつり が八月二
三日と区民広場で催されました。
このまつりは、阪神大震災を契機に岡山県久米郡中央町のボ
ランティアの皆さんが笹を寄贈して頂き、それに区内の幼稚園
保育所・児童館の子ども達が「たんざく」に夢を託す夏の風物
詩です。

「秋」の震災資料室展と

職員作品展

一九九七年九月一日～五日

(正午)

長田区役所七階ギャラリー

主催 人・街・ながた震災資料室
後援 神戸市職労長田区共斗会議

人・街・ながた
震災資料室だより

人・街・ながた
震災資料室 発行
〒653 神戸市長田区北町3-4-13
電話(078)579-2311
発行人/寿 広文
編集人/武川・福谷

第8号

資料室展と作品展
避難所運営日誌公開の
記録集の紹介
震災関係書籍(保管分)

☆はみだし公開情報☆

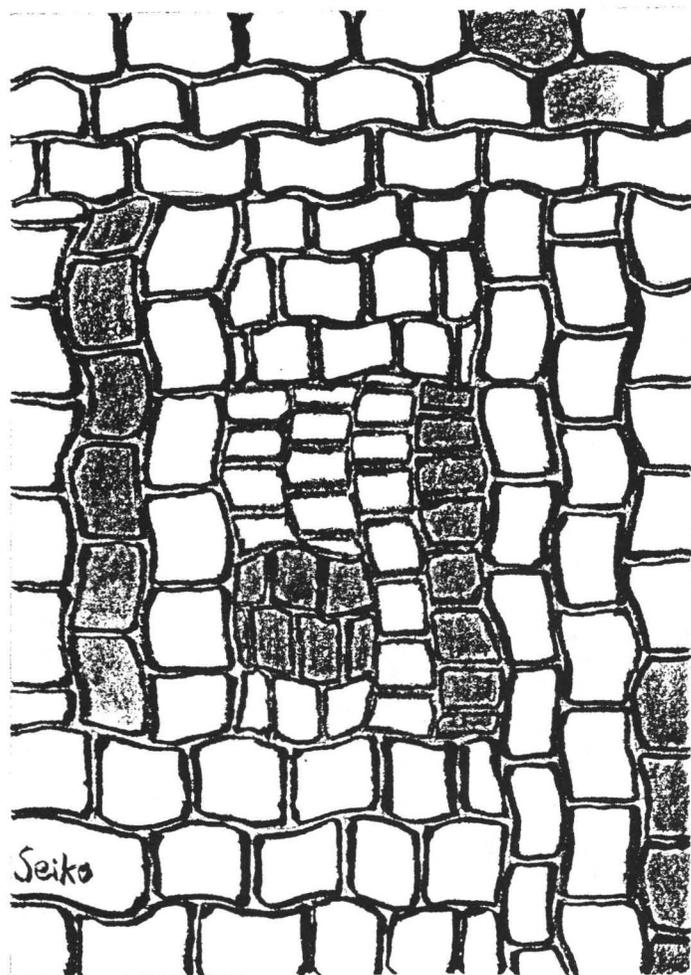
2ページの7ページ

避難所運営日誌を公開 ①のつづき

蓮池小学校

区内で最も広い校区を抱える蓮池小学校
は「寅さん」の映画のシーンにもあったよ
うに廊下まで避難者があふれ、学校に入れ
ない人々は県立文化体育館やグラウンドに移

り避難生活を送った。
日誌を見ると、二日に一度位の割でリ
ダー会が開かれ①ペットの問題②トイレの
掃除③救済物資の受け入れ等々が話し合わ
れていた。
また、先生方による避難者への聞き取り
調査が一月三十日に行われ、「体のこと」
「子供の卒業」「お風呂」「食事」などの
意見が出されている。



え: 内海聖子

震災関係書籍リスト・「震災資料室」保管分

書名	著者・編集	備考
阪神大震災・特別縮刷版	神戸新聞社	報道記録 1995年1月17日～2月17日
いのち結んで	三条 杜夫	その時、被災放送局AM神戸は
コラムニストが見た阪神大震災	三木 康弘・中元 孝	神戸新聞「正平調」の101日
苦闘の被災生活	神戸新聞総合出版センター	
甲南大学の阪神大震災	藤本 建夫・森田 三郎	16名の犠牲者と壊滅的な施設破壊を受けた
航空写真集・阪神淡路大震災・	神戸新聞総合出版センター	1995/1/17～21日 激震直後5日間の記録
阪神大震災 もう一年、まだ一年	阪神大震災を記録しつづけ	68人の生きる記録
生きる 大震災ゼロからの出発	神戸新聞総合出版センター	
大震災100日の軌跡	神戸大学震災研究会	
大震災その時、わが街は	神戸新聞記者	
大震災地下で何が	神戸新聞社	
兵庫県南部大地震と山崎断層	神戸新聞総合出版センター	
カメラが震えた日	朝日新聞社出版写真部	
激論・提言 阪神大震災	朝日新聞社「論壇」	後世へ残す大災害の記録
阪神大震災・大阪本社紙面集成	笠原 孟夫	1995/1/17～2/17日
次の大震災 首相から主婦までの危	吉野 準	
大震災 その時の朝日新聞	朝日新聞社大阪本社編集局	
大震災の企業防衛	朝日新聞社大阪本社経済部	ケーススタディ

避難所運営日誌を公開

①

兵庫高校、長楽小学校、蓮池小学校、県立文化体育館、宮川地域福祉センター、神楽小学校 他

震災時、三万五千人余の人々が区内七九ヶ所の学校や施設へ避難され、余震や火災の続く中で身を寄せ合い支えあって過ごした。

このたび、資料室のスタッフがダンボール箱に収めていた当時の日誌や食事配給メモ等の整理を行い、公開できる運びになった。

それぞれの避難所の資料の一部を紹介すると……



兵庫高校

当初二五〇〇人が避難し、二月十四日現在一一八人、給食数が二七〇〇食と、区内最大の避難所となった兵庫高校の日誌は班長会議の記録が残されている。二月十二日のメモを見ると校庭に開設した「連合あったか湯」の記事がある。午前一時から二時に白浜温泉の湯が届く。午前八時から午後四時まで（お湯がなくなるまで）お風呂を開く。湯かげんチェックは午前七時とキメ細かい。また、午前十時には連合の湯（弁天の湯）到着。そして風呂の分担は①湯かげんチェックは神戸市、②受付及び湯の補給は連合及びボランティア、③風呂掃除はボランティア……と。

六月五日には、鈴蘭台西高から三年生四〇〇人が帰って来るに伴い、使用トイレや呼び出し放送の時間の変更のチラシ等が綴られている。また別のファイルには食事配布のメモ類がビッシリと保存されている。

長楽小学校

早い時期から「阪神大震災被災者長楽小学校運営委員会」が設けられ週に二回程度、役員会が開かれ避難所の運営がされて

長楽
食事配給登録カード

震災避難所 長楽(姉妹)小学校

ご住所 長田区腕塚町9- [redacted]

お名前 [redacted]

ご年齢 69歳 登録番号 6

ご家族数 3人

いた学校。運営委員会は委員長の下に副委員長・顧問・相談役・校外ボランティアがあり、物資部・衛生部・保安部・情報部に分けられていて、避難者や周辺住民には黄色の「食事配給券」が配られており、この券にもついて食事が配布される仕組みになっていた。この長楽小学校は、自治労ボランティア東京グループが二月六日から三月末まで入っていて日々の様子が詳細に記録されている。

震災資料室

「記録集」の紹介

阪神淡路大震災のメンタルヘルス

— 子供のケアを中心に —

人見 一彦 / 著

一九九六年二月発行

「震災の直接の影響が猛威を振るった時期は過ぎようとしている。『震災直後』の影響も甚大であったが、これから訪れてくる『震災後の災難』の時期はもっと厄介である。それは、行くところがない人たちをさらに追い詰めていく。その影響はじりじりと現れて着て、心身を蝕んでいく。大人の心が蝕まれれば、それは直ちに子供の心に響く」はじめの言葉で著者が述べている一節である

災害症候群— 第一段階Ⅱ活動開始期（茫然自失、放心状態、無目的な行動）・第二段階Ⅲ救援期（愛他的、周囲への関心が高まる）・第三段階Ⅳ復興期（被災者がコミュニティと一体感を持ち復興事業に参加する段階）・第四段階Ⅴ復旧期Ⅱ平常への復帰の段階、災害の長期的影響についての悩みを認識し批判と不満が表出）

震災から二年半がたったが、震災症候群は続いている。子供、お年寄り、復旧の中心となつて人々にさえ、せめて自分達の心の置かれている状況を知ってほしいと思う。

阪神大震災

被災した私たちの記録

阪神大震災を記録し続ける会 編

二九三頁

「悲しみ」「生きる」等十八項目に分けられた五歳から八十五歳、日本をはじめ十二の国の人々の震災体験手記。三月十五日の投稿締め切りまでに寄せられた、二四〇通から七三人の手記が載っている。

「被害の体験記」が集まるだろうという会の予想に反して、寄せられたのは「闘う手記」で、家をなくし、みぞうの大震災に打ちのめされながら、復興に向けて立ち上がる決意が生々しく綴られていた。（編集後記より）

「阪神大震災を記録しつづける会」では、この本を「震災からの復興史」の第一巻と考え、今後も引き続き、手記を募集し、会を支援してくれる会員も募集している。

大震災

その時、わが街は

神戸新聞社 / 編
一九九五年九月発行

この本は、一九九五年二月一六日から六月一日までに神戸新聞で連載された「大震災 私たちのそれから」を一部加筆・訂正し、まとめられている。「I 闘を裂く地鳴り」「II 過信砕いた震度7」「III 断たれた生命線」の三章で、時間の経過を追いながら被災時、被災者、避難所、救援活動、水や状況を簡潔に、淡々と書かれている。当時は様々な情報がとびかき、目の前の事柄に振り回され、対応しきれなかった事柄のこのことのように思われる。段落ごとにそれぞれの立場になって、あのときのこと、現在、これから、と考える。読んでいて、そう思ったことを考えざるを得ない本だと思った。



資料提供の紹介

鈴木 邦彦 (長田区房王寺町) 様

▼震災当時の広報紙、配布冊子・ビラ等
兵庫県プロパンガス協会 様

▼兵庫県南部地震状況報告・復興への対策と
教訓・記録阪神大震災・LPガスの活躍

ありがとうございました